工明会と私のねがい

渡辺寧

本籍、茨城県久慈町一三二三
大正十年東京帝大工学部電気科卒
大正十年同講師、十一年助教授
十五年工学博士、昭和二年～四年迄ドイツ、アメリカ、スエーデンに工学研究の為出張、昭和四年同教授、二十八年学術会議会員当選二期、三十一年～三十四年工学部長

去る三月四日に私は宇田教授とともに最終講義をいたし、機大講義室を一杯に満たした学生諸君や卒業生、同僚にお別れをし、まもなくこの忘れられようもない学園ともお別れしようとしている。

私は一時間半にわたつた最終講義の結びとして「真理探求の場こそ若きも老いたるも精魂を打ち込むにふさわしい」と述べたが、若きはもちろん学生諸君への呼びかけであるが、私自身にいいきかせるように「老いたるも」と申し添えたのであつた。

◇

大学の理念は学問の研究であり、真理への目をひらかせることに

よつて、学生の人格形成に奉仕することであることは申すまでもない。研究すること、教授すること、教養を身につけることが、大学の三要素であるともよく言われることであるが、このうち第三の要素である教養によつて、人間の自己形成に励むということが、あまりに抽象すぎる嫌があることに、新制大学のいろいろの悩みがありはしないかと思われるのである。

真理探求と同様に、自己形成ということは、人間一生の永い間の悲願であるとさえ私は考える。だから私は短い大学在学期間でこの目的が達成されるとは考えない。ただ希望しうることは、この大学という学問の府において、将来に続くであろう長い一生に役立つような、学問の道、人間を育成する道をどう歩むべきかを、自ら工夫出来るようなしつけを、体得しなければならないことにあると思う。

このためには、教授と学生とが一つの意図のもとに、相互の熱意を傾注しあうことが、一番大切なことであろう。大学の理念が真理探求にあるとする学風ならば、学生はそれを通じて教授の研鑽、教育から人間形成の躾けを学ぶべきであろう。ここに始めて師弟間の望ましい接触（communication）が醸しつくられる。

◇

それにもまして大切なことは、学生相互の接触から自己形成への道が通じておることである。私達年輩の人達が旧制高校を郷愁のように憧がれる理由は、かつての寮生活や運動部活動などから、畏敬

するにたるあまたの友人を見出し、相互に人間形成に励み合つたことの憶い出があるからである。

私は永い間の学園生活において、学生との接触はできるだけ考えて来たが、現在これを阻むものは教官の多忙さと、学生数の過剰とである。しかし、それとても必ずしも不可能というわけではない。この意味で工明会は私にとつて忘れ難いものであつた。

教官も学生も同様に、もつと工明会の機能へ関心を寄せなければならないと思う。かつて集会所で十名ばかりではあつたが、学生諸君と忌憚ない話し合いをしたことがある。そして私は自分の学生時代の感覚と、いまの学生諸君との間に、幅広い時代の相違を認めねばならなかつたにせよ、この接触はいまの世代ではなおさらに緊要であると考えたのである。（電気工学科教授）